
ソロモンの刻印

風太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソロモンの刻印

【Nコード】

N9753M

【作者名】

風太

【あらすじ】

昔世界この世界に悪魔が攻めてきた、だが、不思議な力を持つ者達が悪魔を倒し、脅威は去ったかのように思われた、いまその脅威が再びこの地に降り立とうとしている

力の覚醒（前書き）

初作品です、何かと不安定な場所もありますが、多めに見てやってください

力の覚醒

ソロモンの刻印

[illegible]

2010年俺達はすげー奴らと出会った・・・

俺達はいつも平凡なこの世界に飽き飽きしていた、確かに俺達はそんな何のへんてつもない日常が１８０度ガラリと変わればいいと思っていた、でも「あの日」を境にマジで変わっちまった・・・

そうあれは俺たちの最後の平和だったんだと思う……

俺達はいつもどおり朝連に行く途中だった

琢「なあー、マジなんかおもしれえ事おきねえかな」

龍「そう簡単に起きたら警察もいらねえよ馬鹿」

祐「はあー、コロツケ食いたい」

龍「どうやって、その方向に話がつぶ……」

祐「だつてよお」

琢「うつせえ、考え事してんだからだまつてろ！」

そんなどうでもいい話をしている最中今まで五月蠅いほどに鳴いていたセミの声がぴたりと止まったそれだけならまだしも空が紫色にそまっていた

琢「地球温暖化も深刻になってきたな」

祐「そうだな、だって空が紫にそまってんもんな」

龍「ちよいちよいちよいちよい！」

琢·祐「何？」

龍「何処をどう考えたらそういう考えになるんだ」

琢・祐「さあ？」

龍「周りをよく見る」

琢「？」

祐「あ！」

二人は啞然とした周りの人いや周りにいた、すべての生き物が止まっていたのだ

琢「なんだよ、これ・・・」

祐「なんで、みんな止まってんだよ、それになんで龍はそんなに冷静でいられるんだ！」

龍「俺はコロッケを食べたからだ」

祐「あ！ずりいぞ」

琢「あのおー、おもつきり話がずれてるぞ」

こんな時でも自分達のペースは崩さない三人だった・・・その時

ドゴーン！

急に爆発音が鳴り砂煙がおきた

琢「なんだ！」

砂煙が落ち着いた頃中からあり得ない生物が現れた

琢「な、なんだよあれ」

龍「な、何であんな、生物がいんだよ」

そう、砂煙の中から出てきたのは雷を纏った角の生えた馬羽の生えた馬と熊を足して割ったみたいな奴

それと青い龍

琢「あれは上から：神の使い麒麟：創造獣グリフォン：北の方角を守る」とされる神獣青龍」

祐「のんきに解説してる場合じゃないぞ！」

麒麟達は琢達めが突っ込んできた

龍「ぬおお」

琢達は右に飛んでかわしたものの体制を立て直したときには既に麒麟達はこちらに向かってきていた、琢達は死を覚悟して目をつぶったその時頭に言葉と声が聞こえた

？「助けて」

？「お願い、僕たちの名前を呼んで」

琢は頭の中で答えた「誰だよお前ら、どうやって助けたいんだよ」

？「うるせえー、お前たちは知ってるはずだ、ごたごた言ってるえでさっさと呼べ！」

琢は声と共に聞こえた言葉を叫んだ

琢「グリフウス！」

琢が叫んだのと同時に別の声が聞こえた

龍「ソウリュウ」

祐「ライカ」

次の瞬間琢達の目の前が真っ暗になった・・・

？「・・・きろ」

琢「ん？」

？「・・・す・・・きて・・・ださい」

祐「んん！」

？「お・・・きろ」

龍「うー」

謎の声により目覚めた琢達は唖然としたなぜなら目の前にはさっきまで居た場所とは全くと言っていいほど違う場所だった、その世界は一面真っ白で何も無い世界だった

琢「な、なんだここ」

祐「知るか！、というかなんでお前らがここに・・・はっ！まさか此処が天国か！」

龍「馬鹿か、ここが天国なら他にもいろいろな人が居るはずだ」

祐「な、なら、ここは何処なんだ！」

？「ここは精神世界です」

琢達「！」

突然背後から声がした琢達はすぐに振り向いた、そして振り向いた琢達は後ろにとんでその声の主から距離をとって叫んだ

琢「また、お前らか！、いったいお前らは何なんだ」

グリ「僕の名前はグリフウスだよ、マスター」

琢「マ、マスター!?」

ライ「コラ、グリフウス、ちゃんと順序を踏んで説明しなければ、いけないだろうすいませんマスター」

ソウ「いいんだよ、そんなめんどくせえことしなくてもマスター達なら理解するって」

いきなり現われ自分たちをマスターと呼ぶグリフウス達に戸惑う琢達だったがそんな状態でも一つだけ分かった事があった、自分たちの頭に響いたあの声の主はこいつらだということそしてこいつらは決して悪い奴らではないということ

琢「すまんが、一から説明してくれ」

祐「そ、そうだ説明しろ」

龍「俺的にはこの生物達の方が興味がある」

ライ「ハイ、わかりました、マスター、まず私たちは契約獣と呼ばれています」

琢「契約獣ねえ」

グリ「そうそう、それでね、僕たち契約獣にはねマスターがいるんだ、それで僕たちのマスターがマスター達なんだよねライカ？」

ライカ「はい、あつてます」

龍「まで、確かにそこまでは分かった、だが何で俺達がお前らのマスターなんだ契約獣と言うなら何らかの契約が行われるはずだぞ!」
琢達は確かにそうだと思った

ソウ「何言ってんだ、俺達は何千年も昔から仲間だろ」

祐「はあー?、何言ってん」

祐が言いかけたとき真っ白の世界が崩れ始めた

ライ「どうやら、時間のようですね、」

琢「どういう事だ時間って」

ライ「要はマスター達が目を覚ますということです」

祐「なるほど」

そうこうしてると世界が琢達の後ろの床が崩れていた

ライ「もう時間がないです、いいですか、よくきいてください」

琢「何をだ！」

そしてあと数秒で世界が完璧に崩れるという時にライカが言った
ライ「合言葉は名前です」

そして世界が崩れ琢達の意識は途切れた……

琢「は！、ここは何処だ！」

龍「俺達の世界のようだ」

目を覚ました琢は先に目覚めていた龍に現状をきき安心した」

琢「ふうー、よかった」

龍「だがまだ空は紫のようだがな、あーははは」

いきなり笑い出す龍に一瞬戸惑った琢だったが空の色が戻ってない
ことについて考える事にした

琢「そういえば祐は？」

祐がいない事に心配になった琢は龍に聞いた

龍「祐か？、祐ならそこで大口あけながら寝ているよ」

そう言いながらある場所を指差した、琢は龍が指さした場所を見た、
するとホントに大口を開けて寝ている祐を発見した

琢「ほんとだ」

祐を見つけた琢は祐の元に近ずき横腹を思いつき蹴った、すると

祐は謎の声を叫びながら吹っ飛んだ

祐「痛いなあー、何すんだ！」

琢「うるせえ」

祐「うるせえとは何だうるせえとは、ん？、琢なんだそのブレスレ
ット？」

琢「ああ、ブレスレット？」

琢はそう言いながら自分の手首を見ると身に覚えのないブレスレ
ットが付いていた

琢「なんだこれ」

龍「それなら、俺達にもついてるぞ、最も俺はピアス、祐は指輪の
ようだがな」

祐は自分の指を見た確かに指輪が3つついていた

祐「これって、いったい何なんだ」

龍「そこまでは知らん」

琢と祐は内心何でその言葉を自信満々に言えるのか全力で不思議に思った

祐「それはそうと俺達以外に動いてる奴いないの？」

祐は周りを見渡しながら言った

祐「ん？」

祐は遠くの方から何かがものすごいスピードでこちらに飛んできているのが見えた

祐「なんだ？あれ？」

琢「どれどれ」

琢も祐の言葉を聞きその方向をみたそして

琢「な、なんだあれ」

琢は思わず声を荒げた、さっき祐が見つけた時よりも近くに来ていて姿が見えるようになっていたそして琢はそいつを知っていた

琢「あれ、悪魔だぞ」

龍「なに！」

そう、飛んできたのは悪魔だった、悪魔と言っても大きさに小悪魔だった

悪「ききき、なんだ俺様の死界の中で動いてる奴がいると思ったらソロモンの刻印者か」

琢達の前まで来た小悪魔は不敵な笑いをした後に言った

龍「ソロモンの刻印？、なんの事だ？」

悪「え？・・・あはは、こりやいいこの時代の奴らは刻印のことを忘れる程に平和ボケしてんのか」

祐「だから、なんなんだよ刻印って」

悪「あ？ききき、聞く必要なんてないよお前らはいやこの世界は俺らが壊すんだからよ」

その言葉を聞いた瞬間琢達の中の何かが切れた

琢達「あ？、」

祐「お前今なんてった？」

悪「あ？だから聞くひつ」

龍「ちげえよそのあとだよ」

悪「だ・か・ら、この世界は俺らが壊すったんだよ」

琢「おい悪魔、イレモンだかワレモンだかしんねえがよ」

龍「俺達の世界壊すなんざ」

祐「全治全能の神が許そうと」

琢達「俺達が許さねえ」

琢達は悪魔に向かって親指を突き立て逆さにした

悪「おもしれえ、やつみろ」

悪魔は腕組をしながら言った

祐「うらあああああ」

ゆうは悪魔に向かって突っ込んだそして・・・

祐「ちえすとおおおお」

ドロップキックを放った

悪魔はそれを横に避けた

龍「馬鹿が、こつちだ」

悪魔の後ろに回り込んだ龍は悪魔の頭を殴った、そして悪魔は吹っ

飛んだ

悪「ぐはあ」

琢は悪魔が飛んでくる事を予想していたかのように悪魔のとなだ場所にいた、そして飛んできた悪魔の頭を踏みつけた、すると見事に地面にめり込んだ

琢「ウートンショット」

琢「どうだ、ちび悪魔」

そして悪魔はゆっくりと立ち上がり叫んだ

悪「よくもやってくれたな下等生物がああ」

悪魔が叫んだ瞬間悪魔から爆風が起こった

琢「な、なんだ」

爆風が止み琢達は再び悪魔を見て目を見開いた

それもそのはず今まで小学4年生程度の大きさだった悪魔が成人男性ほどの大きさに変わっていたのだから

祐「もう、ここまで来ると何でもありだな」

龍「そうだな」

そして悪魔は手のひらを琢達に向け叫んだ

悪「しねえ！、ダークボール！」

その瞬間悪魔の手から無数の黒い玉が琢達に向かって放たれた

琢「ぐはあ」

祐「うあ」

龍「ぐう！」

悪魔の手から放たれた球は琢達に直撃した

琢達は倒れた

悪「どうだ、力の差を思い知ったか人間が！、きあひやひやひや」

琢「うるせえんだよ、糞悪魔！」

琢はそう言いながら立ちあがった

祐「さつきから言ってたんだろ！」

続いて祐が立ち上がり、そして龍も立ち上がった

龍「俺達は負けねえてよ」

琢達「さつきから言ってたんだろおがゴラ！」

琢達は悪魔に向かって叫んだ悪魔を威嚇するようにそして決意する
ように

その時風が吹き、雷が落ち、木がもえ、雨が降り出した

琢「さあ、この中から好きなものを選べ！」

その1「風により切り刻まれる」

祐「その2「雷による感電死」」

龍「その3「水で窒息死した後火で燃え尽きる」」

琢達「さあ選べ！、ま、お前に選択肢ないけど」

琢達が叫んだ瞬間風や雨が生きおいを増した

悪魔「あれを受けて生きていたことはほめてやる、だが死ぬのはお

前らだ！」

悪魔は再びダークボールを放った、だがダークボールに雷が落ちず
べて消えてしまった

悪「なに！」

琢「どうした？もう終わりか？」

悪「くそ！、うらあああ」

悪魔は再びダークボールを放ったがそれもすべて雷にうち消された
祐「終わりか？、なら次は俺達の番だ！」

琢「行くぞ、エアジェット！」

琢が叫んだ瞬間琢の足の裏に風が集まり琢が走り出すと同時に爆発
した、

そして琢は爆発による加速で風のようなスピードで悪魔の懐に入った
そして

琢「エアボンバー！」

琢が叫ぶと今度は琢の右手に風が集まり玉になったそして琢はそれ
を悪魔の横腹にあて叫んだ

琢「ボム・ザ・オン」

その瞬間風の玉は爆発して悪魔をふっ飛ばした

悪「クソ！、喰らえ！」

悪魔は吹っ飛びながら琢に手の平を向けダークボールを放とうとし
ただが・・・

祐「そうはさせるか！、スパーク一線！」

祐は中指を悪魔に向けた、すると中指から一筋の雷が放たれた

悪「がはあ、あり得ないこんな短時間で力が力が」

龍「2度も後ろを取られるとわ不注意な奴だな」

悪魔は後ろを振り返った

龍「フレイムナックル！」

龍の拳は炎を纏い悪魔を殴りつけた、悪魔はくの字に曲がりながら
吹っ飛んだ

龍「これはおまけだ！、アクアショット！」

龍は人差し指を悪魔に向けて水の玉を放った

悪「糞、なぜだ！、さっきまでは力など覚醒すらしてなかったと言
うのになぜ」

琢達「知らん！」

琢達は声を合わせて言った

悪「なら何故だ！、何故あそこまで使いこなせる！」

琢「んー？、ノリ？」

悪「ノリ、だと？」

琢「うん、ノリ」

龍「もういいじゃないか」

祐「そうそう」

琢「それも、そうだな」

悪魔は琢達の言葉の意味が分からなかった

琢「ん！、わからないか？」

龍「なら教えてやるよ」

祐「理由は！」

3人は悪魔に手を向けて叫んだ

3人「お前が死ぬからだ」

そのとたん、3人の掌にそれぞれ、風、雷、水、が玉の形を形成し
たそして

3人「3種の力で地に墜ちろ！」

3人の手から放たれた3つの玉は悪魔に直撃した

悪「ぐああああああ」

悪魔は崩れ落ちた、琢達は勝利を確信し、気を抜いた、だがその瞬
間悪魔が立ち上がり祐に突っ込んだ

祐はいきなりの攻撃にかわすことも出来ず直撃してしまった祐は後
ろに軽くとんだ

琢「大丈夫か！」

祐「いててて、結構いいの貰っちゃったよ」

龍「悪魔はどうした？」

祐「ん？、消えたみたいだぜ」

琢「そうか」

琢が祐の言葉を聞いて安堵の息を漏らした、すると、空の色が段々元の色に戻りすべてが元道理になった

龍「とりあえず、学校いくか？」

琢「そうだな」

祐「学校に向かってしゅっぱーっ！」

琢・龍「うるせえ（うるさい）」

祐は琢と龍に殴られた

祐「いつてえ、何すんだよ！」

琢「おめえが悪い」

龍「そういうこと」

琢たちの声が聞こえたのは祐の2メートルほど前だった

祐「ちょ！、まってよ」

祐は琢たちの所に走って行っていつも道理の登校をした

余談だが琢達は学校でなぜそんなにぼろぼろなのか聞かれ正直に答え3時間説教を受けたのであった

力の覚醒（後書き）

この小説を呼んでくださり本当にありがとうございました、これからもがんばりたいと思います

ソロモンとキルト（前書き）

レビュー〓やる気〓更新です

ソロモンとキルト

琢たちは通称ゴルゴ先生の人というじわだなあもとい説教を終えて教室に帰っている途中愚痴っていた

琢「はあー、ゴルゴの奴説教なげえーんだよな」

祐「そうそう、しかも、正直に言っても信じるどころか嘘ついたとか言っただけなんだから、ほんときついわ」

龍「というか、逆にあんな話信じる方が引くけどな」

祐「言われてみれば・・・」

龍の言葉に適当に誤魔化しておけばよかったと全力で後悔した祐であつた

？「どうしたの？、三人揃って遅刻＆ボロボロだなんて」

？「、まさかとは・・・思うが・・・朝から・・・三人とも殴り合いでも・・・したのか？」

琢「あ！、睦、それに木介」

龍「違うんだなあこれが、聞いてくれるか？」

睦「もちろん！」

木「話して・・・しろ」

そして、琢達は今日あつた事を話した、話している途中睦と木介の表情がどんどん険しくなっていた

睦「その話、僕たち以外にはなした？」

琢「いっついや、してないけど、それがどうした」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9753m/>

ソロモンの刻印

2010年11月26日12時01分発行